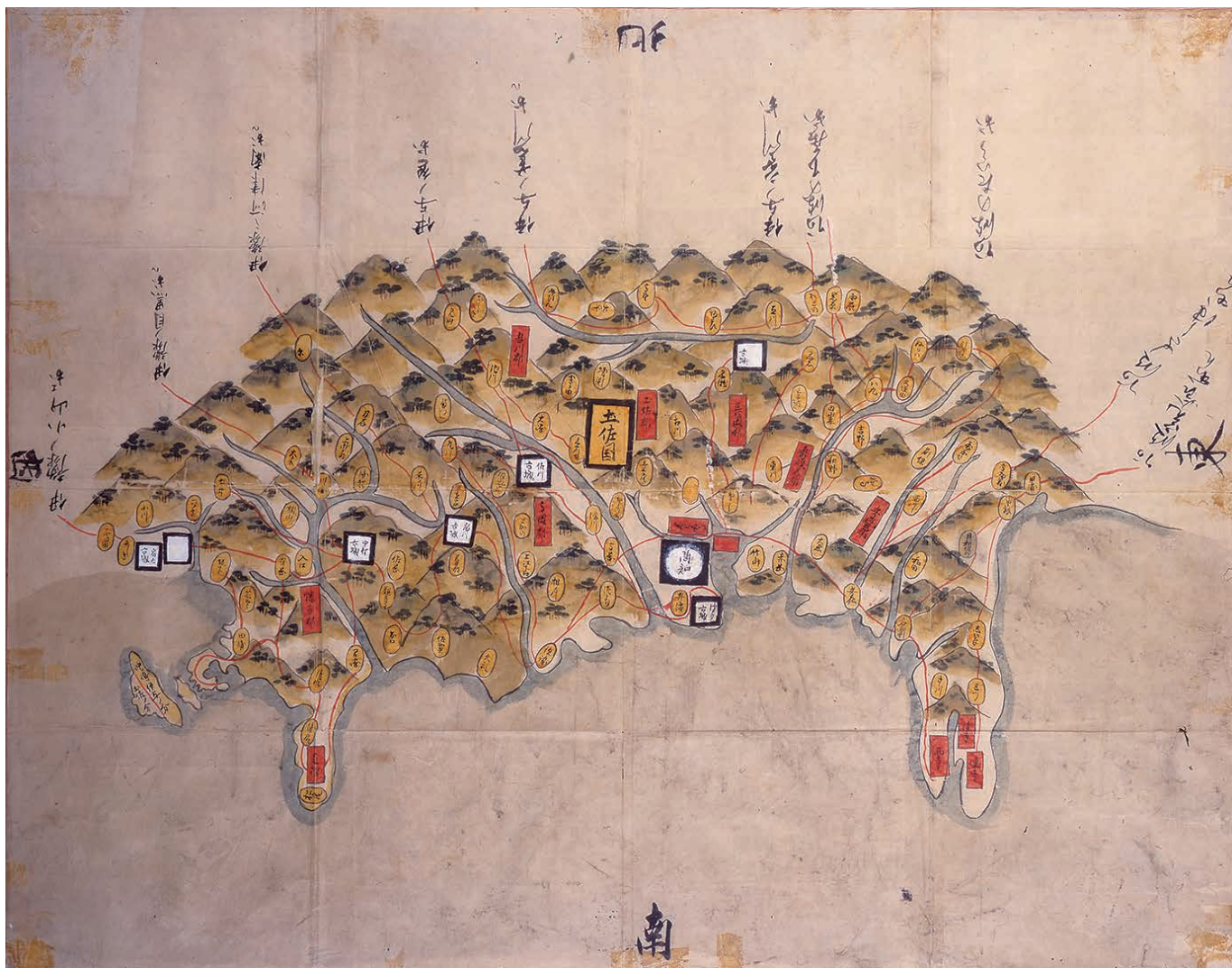


『土佐国絵図』

江戸時代初期の土佐国の様子が描かれる。



「地域記録集 土佐の村々」の発刊にあたって

土佐山内家宝物資料館

そもそも、古代律令国家によって南海道の一国として設けられた土佐国は、地形的には峻険たる四国山脈により他国と隔絶し、気候温暖、また多雨にして、頻繁に豪雨と台風にみまわれる。「古事記」において「建依別」なる男神に例えられた如く、土佐国は四国の中でも雄々しい一種独特の風土を醸成してきた。

思うに、長宗我部氏の四国統一の過程で一層の高まりを見せたであろう国意識は、土佐人・土佐酒・土佐弁等々、今に至るまで連綿たるものがある。

その土佐が戦後、高度経済成長期を境に、急速な過疎化と高齢化の波にさらされている。今や集落の保全・存続さえ困難となった地域すらある。集落の消滅は、その地で展開した歴史や伝承されてきた知恵を失うことであり、それは未来への展望に暗い影を落としかねない。

今、我々の眼前にある喫緊の課題は、地域において散逸の危機にある歴史資料の調査、忘れ去られいく過去の記憶の記録化、そして、それらの後世への継承である。

土佐の村を自らの足で歩いてみよう。天候、土壌、地形、植生、風景等、単に土佐一国の視点では括られぬことに気づく筈である。この自然と大地の多様性は、そこに暮らす人々の発想・習慣・風俗、遂には歴史のあり方にまで影響を及ぼすであろう。

我々に刮目を迫るもう一つの課題がそこにある。個々の地域へのこだわりである。

元来、我々が実感を持って把握できる空間とはなにかと考えたとき、ふと「村柄」と

いう懐かしい言葉が思い浮かんだ。個性を持った地域の単位に「村」がある。現在の「集落」に連続する村は、江戸時代の村である。江戸幕藩体制二百数十年を支えたのは、この生活実感と直結した村の強靱さだったのではないか。かく考えた我々は、地域を記録する単位として、江戸時代の村を選んだ。

国際化、グローバル化等、人々は外へ外へと大きく意識を拡大していき、細かな差異は大胆に捨象されていく。我々は、時代の流れに逆行するが如く、土佐国各地の細やかで多様な髪に分け入って、地域の軌跡を感じてみたい。そして、それらを後世に伝える努力をしていきたいのである。

しかしながら、土佐藩の村は優に千を超える。到底我々だけで対応できる数ではない。今後、多くの同調者・協力者を得て、漸次加速しながら前進することを想定・期待して、いわば見切り発車でこの記録集を始めたいことにした。それほど、事態は深刻なのである。

かかる問題意識をもって、ここに「地域記録集 土佐の村々」の第一号を発刊する。地域のとらえ方や関わり方には様々な方法があるが、私たちのそれは、かように速効性や経済性とは一線を劃したものである。

ある村の道普請に参加した我々に、一人の古老がいった言葉を忘れない。「我々の部落は近いうちになくなるであろう。人も部落も限界が近い。むしろがここに生きた確かな証拠を、後世に伝えてもらいたい。」

私たちは、この言葉を胸に刻み、今始まったこの記録集が、将来必ずや深い意味をもつものになることを信じて疑わない。

土佐藩の村々(江戸時代中期)

郡ごとに五十音順に配列。郡名の下の数字は、郡内の村数を表す。

Table with 10 columns and 100 rows of village names, organized by district (郡) and then by sound order (五十音順). Districts include 安芸郡, 長門郡, 土佐郡, 香川郡, 高知郡, 香多郡, 香川郡, 香川郡, 香川郡, 香川郡.

元禄十三年(一七〇〇)に成立した「郷村帳(元禄郷帳)」に記載された村々

*高知城下町郡中・上町・下町の町筋名については「高知県の地名」(平凡社、日本歴史地名大系40、1983年)巻末の行政区画変遷表を参考にした。

*江戸時代には伊予国宇和郡に属し、明治9年に幡多郡に編入。